

# 「いのちの尊さ」

鳥取県 雲光寺住職 瀬田啓道

「生きてゆくことの意味、問いかけるその度に、胸をよぎる愛しい人々のあたたかさ」、竹内まりやさんの「いのちの歌」は、いのちの尊さ、生きてゆくことについて考えさせてくれる曲です。この曲を聴く度、私は福島県で出会ったあるご婦人のことを 思い出します。

今から十一年前、東日本大震災が起きて二週間後、私は先輩と共に 福島県内の避難所にいました。私たちは避難所を訪問し、珈琲やお菓子を召し上がっていただきながらお話を伺う、「行茶」という活動を行っていました。そこでお会いしたご婦人の話です。

「大きな地震が起きて、慌てて部屋で避難の準備をしていた時、突然 津波が押し寄せてきたの。流されそうだったので、必死に何かをつかんで 耐えてた。なんとか屋根に登って、救助に来てくれたレスキュー隊の人に 助けてもらった。今思えば、あの時必死に掴んでいたのは、天井の板。高い天井だけど、水かさが増した為に体が浮かんで掴むことが出来たんです。夫も、息子も、流されてしまったけど、私が今生きているのは奇跡だわ。生かされているこのいのち。これまで数え切れない程、幸せや思い出をくれて逝ってしまった夫と息子の分まで、頑張つて生きていきます」と、気丈に話して下さいました。

涙ながらに話すご婦人を目の前に、聴いている私も涙が止まりませんでした。私は「本当に辛いお話を聞かせていただき、ありがとうございます。頑張つて生きていきましょうね。どうか、いつまでもお元気で」と言い残し、避難所を後にしました。

あれから十一年。そのご婦人の様子をすることは叶いませんが、どうかお元気でいらしてほしいと願います。尊いいのちをいただいたことに心から感謝する、そんな生き方をご婦人は教えて下さいました。